

第問 次の文章を読んで、あとの問に答えよ。

伊勢大輔、上東門院の中宮と申す時、初めて参れり。輔親の娘なり。歌読むらむと心にくくアおぼしめす間に、八重桜をある人奉る。御堂、御前におはします時、件くだんの花の枝を大輔が許もとへさしつかはして、御硯の上に檀紙だんしを置き、同じくさしつかはしたるに、人々目をつけて、いかが申すと見あへるに、イとばかりありて硯ひきよせて、墨をとりあげ静かにおしりて、歌を書きてこれをウ奉る。御堂とりて御覧ずるに、まことにきよげに書きたり。

〔A〕いにしへの奈良のみやこの八重桜けふ九重ここのへにほひぬるかな

殿をはじめ奉りて、万人感歎し、宮中鼓動すと云々。また、かの人の第一の歌なり。率爾そつじにも寄らざる事か。

また、大二条殿、小式部内侍をおぼす頃、エ日ごろは御所労にて、ひさしくありて平癒ゆして上東門院に参り給へるに、小式部内侍、大盤所に伺候す。オ出でしめ給ふとて、「カ死なんとせしは。など問はざるぞ」と仰せられて過ぎ給ふを、引き留めて申しける。

〔B〕死ぬばかりなげきこそはなげきしか生きて問ふべき身にしあらねば
感情にたへず、かき抱きて局つぼねにおはして、懐抱すと云々。

(藤原清輔『袋草紙』による)

(注) 伊勢大輔いせおほさへ 上東門院に仕える女房。大中臣輔親の娘。歌人。

上東門院かみとうもんいん 一条天皇の中宮彰子。

御堂ごどう 藤原道長。上東門院の父。

率爾そつじ 二にわかなさま。

大二条殿だいにじょうてん 藤原教通。上東門院の弟。

小式部内侍せうしきぶないじ 上東門院に仕える女房。歌人。

大盤所おほいらかし 女房の控える所。

問一 傍線部ア「おぼしめす」、傍線部ウ「奉る」、傍線部オ「出でしめ給ふ」の主語を示せ。

問二 傍線部イ「とばかりありて」、傍線部エ「日ごろ」の意味を記せ。

問三 傍線部カ「死なむとせしは」を単語に分け、それぞれの品詞名を記せ。

問四 「九重」は宮中を指す。〔A〕の歌において、どういう意図で「九重」という語を使ったのか、説明せよ。

問五 〔B〕の歌は、小式部内侍が愛人である大二条殿の病氣見舞いに行けなかつた理由を詠んだものである。また、「生きて」と「行きて」が掛詞になっている。以上のことを踏まえて、この歌を解釈せよ。

問六 伊勢大輔と小式部内侍に関するこの二つの逸話において、共通して賞賛されている点は何か、説明せよ。